

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 9 日現在

機関番号：14401

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23652084

研究課題名(和文) ヒンディー語と日本語の属格後置詞および格助詞・準体助詞の対照研究

研究課題名(英文) A Comparative Study of the Genitive Postposition / Particle in Hindi and Japanese

研究代表者

西岡 美樹 (NISHIOKA, MIKI)

大阪大学・言語文化研究科(研究院)・講師

研究者番号：30452478

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円、(間接経費) 570,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本語の格助詞および準体助詞の「の」と、ヒンディー語の属格後置詞 'kaa' およびしばしばこの代替で用いられる接辞 'vaalaa' を伴う名詞句を対照し、その機能を分析した。主な成果は、「の」と 'kaa' が所有、主格、対格、所格を網羅すること、また、「の」がもつ代名詞(準体助詞)的機能や補文素機能については、ヒンディー語の 'kaa' と 'vaalaa' 共に使用可能であること、さらに前者では 'kaa' と 'vaalaa' が役割分担をしている可能性があること、などが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：This study is an exploration of similarities and differences found in genitive constructions in Japanese and Hindi. Japanese has the morpheme 'no' as a genitive case marker. Hindi also has an equivalent a genitive postposition, 'kaa' functionally equivalent to Japanese 'no'. In addition, Hindi has another 'connector'- the suffix 'vaalaa'. The main findings of this study so far are as follows: (1) both Hindi 'kaa' and Japanese 'no' are used for possessive, nominative, accusative and locative cases, (2) in the functions of pronominal and complementizer either 'kaa' or 'vaalaa' can be used as rough equivalents of Japanese 'no'. In particular, 'kaa' and 'vaalaa' possibly share different parts of the pronominal function.

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：国際研究者交流 国際情報交換 ヒンディー語 属格後置詞 格助詞 準体助詞 日本語 対照研究

1. 研究開始当初の背景

日本語のいわゆる格助詞「の」には、名詞 A と名詞 B をつなぐ、つまり属格を表わす役割と「私のだ」「あなたのだ」「行くのだ」のような体言として働く準体助詞の役割がある。国語学・日本語学では現代文法の先駆けである時枝誠記、橋本進吉、寺村秀夫他、日本語文法を扱う学者の間では格助詞として扱われている。一方、インド・アーリア諸語の主要言語であるヒンディー語は、日本語と異なる系統の言語ではあるものの、同じく名詞 A と名詞 B をつなぐ属格の後置詞 'kā' を持つ。「の」と 'kā' は統語上並行した構造体であり、かつ属格（もしくは所有格）を表すという点ではよく似ているのだが、ヒンディー語には同じく名詞 A と名詞 B をつなぐ、接辞 'vala'（中にはこれを語として扱う学者もいる）を使う表現も存在する。

学術的背景として南アジア諸言語の研究として著名な Masica (1991) の *The Indo-Aryan Languages* では、この接辞の出自と用法の説明がされているのみであった。また、Jagannathan (1980) の *Prayog aur prayog* でも、ヒンディー語学の説明にありがちな用法的な説明、つまり対照ではなく顕著なもの（ここでは接辞 'vala' の用法）の説明に終始していた。

代表者は 2005 年に「ヒンディー語のいわゆる名詞句について 属格後置詞 'kā' を中心に」を執筆したが、以後の発展的課題として、ヒンディー語の 'kā' に加え、'vala' および日本語の格助詞・準体助詞「の」との対照研究により、それぞれの構造体と機能の対応関係を明らかにし、言語の普遍性と個別性の追求に貢献し、さらにこれらを外国語としてのヒンディー語教育に活かすことが求められていた。

2. 研究の目的

本研究では、日本語の属格を表わす格助詞もしくは準体助詞の「の」と、北インドを中心に世界の広い地域にまたがって多くの母語話者をもつヒンディー語の属格の後置詞 'kā'、および属格の後置詞に類似した機能をもつ接辞 'vala' を伴った表現を対照し、両言語に共通して見られる普遍的特徴と個別的特徴を記述することにある。

本研究の最終目的は、両言語の並行した構造体を対照することで、機能的な側面での共通する点、異なる点、さらには似て非なる微細な相違点を明らかにし、これにより、言語の普遍性の探求に寄与すると同時に、その知見を活かし、昨今増えつつある南アジア諸国での日本語学習者、および日本におけるヒンディー語学習者の語学教育に役立てることにある。

3. 研究の方法

本研究の目的を達成するために、基本的に以下の方法をとった。

- (1) 日本語の格助詞「の」および準体助詞「の」について、既存の日本語学者の文法書や日本語の国語辞書等から、文法的機能と意味的機能を整理し、吟味する。
- (2) (1) と同時に、海外での日本語研究や南アジア諸語、その他の言語について、本テーマに関連する Nominalization(名詞化)の言語研究について情報を収集し、対照研究としての方法論の参考にする。
- (3) ヒンディー語の属格後置詞 'kā' について、(1) と同様、既存の文法書や辞書等から、文法的機能と意味的機能を整理し、吟味する。特にサンスクリットからヒンディー語伝統文法に受け継がれている 'samās' (語の合成) を参照する。また、非ヒンディー語母語話者の書いた古いヒンディー語文法も参考にする。
- (4) 接辞 'vala' の文法的機能について、既存のヒンディー語文法書や関連する論文を参考にその機能について整理する。
- (5) 機能別に整理した日本語の格助詞・準体助詞「の」を用いた名詞句を作成する。
- (6) アンケート調査として、ヒンディー語母語話者で外国語として日本語を学習している学生(日本語中級レベル以上)の情報提供者に、ヒンディー語で作文してもらう。また、日本語の「の」を使った例と、代表者が作成したヒンディー語の 'kā' や 'vala' を用いた例が正解か否かを確かめる項目も設ける。
- (7) 上記(6)の調査結果を分析する。特に日本語とヒンディー語の構造体では比較不能なものをあぶり出し、その機能を観察する。必要に応じて研究協力者やアンケート回答者と議論をし、理解を深める一助とする。

4. 研究成果

(1) 時系列の成果概略

平成 23 年度

日本語を含む東アジアの諸言語研究関連の研究会 'XXIVemes Journées de Linguistique de l'Asie Orientale' に参加し、知己の研究者をはじめとする東アジア諸言語の研究者たちと情報交換、意見交換を行った。これに前後して日本語の格助詞、準体助詞に関するこれまでの日本語学で研究されたものを見直し、文法機能、意味機能の整理を開始した。また、それらとヒンディー語との対応を想定したアンケートの作成も併

せて開始した。

インドに出張し、インド人の日本語学習者を対象にアンケート調査を行う環境を整えることを試みた。デリー大学東洋研究研究科所属で日本語・日本文学専攻の Dr. Narsimhan には、しかるべき日本語の習得度の高い学生たちを斡旋していただくことについて協力を得られ、実際に日本語のレベルを自分で確かめるべく、学生たちの授業に参加し、意見交換を行った。また、インド工科大学パトナ校人文社会学研究科所属(当時)の Dr. Kumar にも、日本語の例を基にしたアウトプットとなるヒンディー語について、情報提供者が必要な際に協力いただくことになった。

平成 24 年度

前年度参加した学会である 'XXVemes Journées de Linguistique de l'Asie Orientale' に参加し、情報交換や意見交換を行った。また、CNSR-HTL 所属のチベット・ビルマ諸語の研究者から本研究に深くかわる 'Nominalization' の研究動向について情報提供を受けた。Dr. Narsimhan には、ヒンディー語母語話者の日本語学習者のうち比較的高いレベルにある学生たちを対象に、アンケート調査を予め行っていただいた。インドに出張した際には、その学生たちとアンケートの内容について意見交換をした。その際、国際交流基金ニューデリー日本文化センターでヒンディー語と日本語の言語研究について講演した際に、対照研究の一環として本研究を簡単に紹介した。また、別用務でインドに赴いた際に、チェンナイの Dr. Kumar を訪問し、ヒンディー語の属格後置詞 'ka' と類似機能を果たす 'vala' の使い分けを深く探るため、情報提供者として協力いただいた。特に 'ka' と 'vala' の置き換えが可能かどうかを焦点にして議論をした。

平成 25 年度

最終年度は、これまで実施したアンケート結果の詳細な分析を行った。Dr. Narsimhan を日本に招へいし、日本語の「の」と学生諸君が書いたアンケート中の作文に見られる属格後置詞 'ka' と 'vala' を用いた名詞句や文を丁寧に吟味した。

次に南アジア諸語を長年研究してこられ、その他の言語との類型論研究も行っている研究協力者 Dr. Hook を招へいし、このヒンディー語の属格後置詞 'ka' と 'vala' の用法とインド・アーリヤ諸語についての歴史的な知見をもとに、議論をすることになった。日本語の「の」の機能の歴史的な変遷についても意見

交換し、Wrona(2012)の“The Early History of no as a Nominaliser”の機能が参考になる可能性があることを示唆された。

これらをまとめ、本研究課題の成果として、International Conference of South Asian Languages and Literatures で発表した。

(2) アンケート調査による知見

アンケートは2部構成である。一つは指示代名詞の「の」を始め、1.所有、2.「モノ」の意を表わす準体助詞とそれを使った文、3.「コト」を表わす準体助詞を使った「ノダ」文と「ノヲ」の文をヒンディー語に訳すもの、もう一つは、「この本は彼のだ。」のように、「モノ」を表わす準体助詞「の」場合に 'ka' の代わりに 'vala' を使用できるかを問うものである。

このアンケートにより得られた知見のうち顕著なものは以下の通りである。

準体助詞「の」が所有を表わす場合は 'vala' ではなく 'ka' を使用する。それ以外の場合、既出の名詞を照応する場合は 'vala' となる。

「その本はガンジーが昨日買ったのだ。」のような節によって修飾される場合の「の」は、ヒンディー語では関係詞節を用いるか、語順変更で表わす。

日本語のノダ文については、書かれたものでは平叙文と同じだが、発話時は「ノダ」によって強調されるべき語句が強調される。つまり、イントネーションによる弁別となる。

(3) 文献からの機能整理

国語学や日本語学の文献を参考にし、格助詞「の」機能を具体的に吟味した。また英語で書かれたヒンディー語の古い文法書やヒンディー語の伝統文法の文献の中に見られた 'ka' の機能を整理した。名詞Aと名詞Bをつなぐこれらの共通する機能は、所有 (Possessive)、主格 (Subjective)、対格 (Accusative)、所格 (Locative) である。これらの他に広義にAとBの関連性 (Reference) を示すカテゴリーを立てたが、これについては引き続き、大量データに基づく詳細な分析を要する。

以上が日本語の格助詞「の」とヒンディー語の属格後置詞 'ka' の細かなレベルでの分析である。

(4) 「の」の歴史的機能変遷を視野に入れた対照分析

Wrona(2012)が示している、歴史的な発展から見た日本語の「の」の機能を参考に、ヒ

ンディー語との対応関係を考察した。具体的には、繫辞 (Copula)、属格 (Genitive)、主語マーカー (Subjective marker)、準体助詞に相当する代名詞的機能 (Pronominal)、補文素機能 (Complementizer)、談話文法的な「の」(Stance-marker) が上がっているが、このうちこれまでの文献資料や経験から推察される代名詞的機能 (Pronominal)、補文素機能 (Complementizer) の二つに絞り、ヒンディー語の 'ka' および 'vala' で置き換えた名詞句を作成し観察した。

結論としては、この二つの機能の場合、'ka' および 'vala' で置き換えることができる。特に代名詞的機能、(すなわち準体助詞的機能) では、ヒンディー語のこの 'ka' と 'vala' が役割分担をしている可能性があることが判明した。つまり、「モノ」や「ヒト」を指している場合は前者を用い、既出の名詞を照応するのが後者という具合である。また、補文素機能については、'vala' は、名詞 A が名詞句または動名詞句の場合、名詞 B がその主語となる場合に使用され、他は 'ka' を使用する。

日本語の「の」についてはこれらの機能を一手に引き受けているため、母語話者になればなるほど普段から意識しておらず、機能の弁別にはなかなか及ばないことが改めて浮き彫りになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計 2件)

- (1) Nishioka, Miki. "Genitive Case Markers in Hindi and Japanese: A Comparative Case Study of Genitival Constructions", in International Conference of South Asian Languages and Literatures 11th, Benares Hindu University, Varanasi, UP, India, Jan 24th, 2014.
- (2) Nishioka, Miki. "Hindi and Japanese: Perspectives from Contrastive Linguistics and Linguistic Typology", in the Japan Foundation Lecture Series 2012: Part II, The Japan Foundation, New Delhi, India, Sept 14th, 2012. [lecture]

[その他]

ホームページ等

<http://www1.lang.osaka-u.ac.jp/user/dumas/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西岡 美樹 (NISHIOKA MIKI)

大阪大学・言語文化研究科・講師

研究者番号: 30452478

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

フック ピーター イ (HOOK PETER E.)

Professor Emeritus of University of Michigan and visiting researcher of University of Virginia

ナラシマン ランジャナ (NARASIMHAN RANJANA)

Assistant Professor of Japanese Language and Literature Department of East Asian Studies, Faculty of Social Sciences, University of Delhi

クマール ラジエッシュ (KUMAR RAJESH)

Assistant Professor of Department of Humanities and Social Sciences, Indian Institute of Technology Madras